

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520232

研究課題名（和文） 近現代英米文学における環太平洋異文化表象の思想史的研究

研究課題名（英文） A Historical and Theoretical Study of Representations of Pan-Pacific Cultures in Modern British and American Literature

研究代表者

新井 英永 (ARAI HIDENAGA)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00212598

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：D・H・ロレンス、批評理論、脱領土化／再領土化、群衆、アジア、優生学、セクシュアリティ、ポストコロニアリズム

1. 研究計画の概要

英国のモダニズム作家 D・H・ロレンスがヨーロッパとアメリカ合衆国を舞台として書いた『セント・モア』(1925)と当時の欧米のアジア観やアジア表象との比較検討により得られた洞察を出発点として、近現代英米文学において環太平洋諸国あるいはそこに住む人々が、欧米植民地主義・帝国主義等を背景にどのように表象されてきたのかを文学・思想的に解明することにより、今後の英米文学・文化の一層の理解、さらには環太平洋地域における有意義な文化・社会的交流のための視座を提供することを目的とする。

2. 研究の進捗状況

本研究の出発点かつ柱である英国のモダニズム作家 D・H・ロレンス (1885-1930) の環太平洋地域を舞台とした小説に関しての論考がまとまり、単著『D・H・ロレンスと批評理論』の核となる部分として公表することができた。以下にその概略を述べる。

(1)『カンガルー』における群衆の概念あるいは表象の意味と機能は、同時代の社会的言説、

とりわけイギリスの生理学・社会心理学者ウィルフレッド・トロッター of 著作との比較を通して明白になった。すなわち、この小説におけるロレンスの群衆観は、優生学的社会再編成に批判的であったフロイトの群衆観に近いものとして位置づけられる。

(2)『カンガルー』が一定の価値を与えていた復讐心に駆られる群衆が、『セント・モア』では消滅し代わりに地球を覆う悪が前景化する。その際現れる「アジアの中心」という表象は、これまでほとんど注目されることがなかったが、具体的にはタタール地方を指す可能性が高いことを実証した。さらに、この「アジアの中心」が悪の起源として表象されていることに注目し、当時の英米における黄禍や汎モンゴル主義への危機感と『セント・モア』が密接に関わっていることも解明した。

(3)ナチズムやポストコロニアリズムも視野に入れつつ、『羽毛の蛇』における性の表象をミシェル・フーコーが引用した主人公ケイトの言葉を出発点として考察すると、必ずしも性が無批判に肯定されているわけではな

いこと、ならびに、ロレンスもフーコー同様、性が人々を隷属させているという洞察を有していたことが分かった。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

これまでの研究成果をまとめて著書を刊行できたことは予定通りであり、重要かつ大きな成果であった。しかし、その出版が予定より遅れたため、ロレンス以外の作家研究にも遅れが生じているのが現状である。

4. 今後の研究の推進方策

昨年度（平成 20 年度）に刊行した著書の研究内容を海外に発信することを目指す。海外の雑誌への投稿を視野に入れるが、雑誌の場合には部分的な成果発表にしかならないので、できるかぎり多くの論考を英語でまとめ直し、英語版の刊行を目指す。並行してロレンス以外の作家の研究も当然推進したいが、国内外の最新の研究成果を踏まえたとえでの海外発信が優先されるべきであると考え

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

新井英永、「D・H・ロレンス『羽毛の蛇』をめぐる近年の—批評動向——セクシュアリティ、ナチズム、ポストコロニアリズム」、『言語文化学研究 英米言語文化編』（大阪府立大学 人間社会学部 言語文化学科）、査読無、第 2 号、2007 年、37-56 ページ

〔図書〕（計 2 件）

1. 新井英永、国書刊行会、『D・H・ロレンスと批評理論——後期小説の再評価』、2008 年、総ページ数：206

2. 新井英永、慶應義塾大学出版会、『D. H. ロ

レンスとアメリカ／帝国』、2008 年、209—37 ページ

〔その他〕

書評：

1. 新井英永、「遠藤不比人・大田信良・加藤めぐみ・河野真太郎・高井宏子・松本朗（編）『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』」、『英語青年』、2009 年 3 月号、65 ページ

2. 新井英永、「武藤浩史・川端康雄・遠藤不比人・大田信良・木下誠（編）『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950 年』——高密度の相互参照により織り成された画期的テキスト』、『週刊読書人』、2007 年 6 月 1 日号、5 ページ